英文学にあらわれた女性像
—エミリー・ブロンテを中心として—

宮　川　下　枝

私共の大学では小倉の地で大学公開講座を開催致して居りますが，英米文学科では英文学にあらわれた女性像と題して一連の講座を続けております。これは私が19世紀を担擔して Emily Brontë を中心として講演したものを収録したものであります。

荒野に育ち荒野をこよなく愛したエミリー・ブロンテの作品からその女性像を学び彼女の訴えんとすることを御一緒に考えてみたいと存じます。

次回の先生がモームを中心としてお話しになりますが，男性作家が興味の対象として眺める女性像と，女性作家が取り扱う女性像とは自ら見地を異にしていると思われます。女性の扱う女主人公達には，作家そのものの姿が惨み出て来るものではないかと思いますと，どうしてもその伝記を考えておきませんと，話をすゝめていくわけに参りません。

（只ここでは紙数の関係上大ざっぱに捉えておきたいと思います。）

地図で御覧のように英国の主都ロンドンより遠く離れた Yorkshire の Haworth という山の中腹の片田舎のまちに，エミリーは牧師の娘として育って居ります。そしてこのエミリーを考えます時は，姉 Charlotte. 妹 Anne の存在を切り離して考えることは出来ない程，三姉妹として才能ある女流作家であったことは驚異に価することであります。だが彼等は決して華々しくデビューしたわけではなくコツコツと書きためた詩，又各自の小説を出版するにあたっては男性名を用いて彼等の存在をひた隠しにしようとした異色の存在であります。彼等の才能は，アイルランドの血統の父の給費生としてケンブリッヂに学んだ程の頭脳のよさ，母の繊細な感情を受けついだものでありましよう。又父の持つ読書欲は彼等姉妹に深い知識慾を与え，その旺盛な知識の結果彼等はブラッセルに海を越えて渡りそこで巾広い勉強をしたということも大いに役立って居りましよう。だが人里離れた淋しい環境故に彼等は兄姉妹揃って，只想

像力を駆使し乍ら遊びに耽ったということは後に偉大な作品を書く上の助力となって居ります。

母を失い姉たちを失い弟の堕落に逢い乍らも毅然として生き続けたこの三人姉妹には深い頭の下る憧敬の念を覚えます。更にエミリーに就いて忘れてならないことは，彼等の育った荒野に対する激しい愛着，美しい自然えの憧憬，細い観察，それに対する溢れる歓喜，更に彼女の愛した自由の精神，独立心の確立だと思います。

そして死に到る迄強固な精神の持ち主であったエミリーが医者にも診て貰うことなく病気を耐え通して息を絶えた事実等忘れてはならない彼女の一面だと思います。

さて本論に入りたいと思います。

Wuthering Heights 「嵐ケ丘」に出て来る女性を見ますと次のようなものです。

Catherine Earnshaw

Catherine Linton

Isabella Linton

Nelly Dean

こうした四人の主とした女性達が登場致しますが，一人 minor な人物で興味深いのは女中の Zillah であります。女性像と云えば一番多彩で興味深いのは，英文学史上何と云っても Shakespeare であると思われますが，エミリーの中の女性達も多彩な面を持ち，母 Catherine と娘 Cathy の対照的な処等 Shakespeare の ***Tempest*** の中の，Miranda. と ***As You Like It*** の Rosalind との対比の面白さがうかがえますが，エミリーも偉大なシエクスピアは読んでいたのではないでしょうか。父ブランウエルには厖大な蔵書があり，それを愛読した姉妹達は旺盛な読書欲を持って読破して行ったようであります。

姉シヤーロットが書いた18才の時の読書リストの中には，Scott, Byron, Compbell, Wordsworth, Southy 等夥しい詩人の数をあげ，Shakespeare の喜劇はつまらないが悲劇を読みなさいと云って，Henry Ⅷ，Richard Ⅲ，Macbeth, Hamlet, Julius Caesar 等を挙げています。"You can gather evil."[(1)] と彼女は書いていますから，妹エミリーもその影響を受けてシエクスピアを読んでいたのでありましょう。たしかに彼女の作品に現れる evil はシエクスピアの作品等から学んだ処が多いと推察できます

(1) Norman Sherry "***Charlotte and Emily Brontë***

が，ここで取扱うのは女性像であります故その女性の姿の扱い方の面白さもシエクスピアの影響を受ける処大いにあるのであろうと思う次第であります。

さて一人一人の女性から見て参りましょう。

(1) 母，*Catherine Earnshaw*

自由奔放な姿

既に嵐ケ丘は御存知の小説でございますからあら筋を申し上げる必要はないと思います。ヒースの丘に成長した少女キヤサリンは自由に　野を走り廻る少女としてその少女期を過し，父がリバプールから拾って参りましたヒースクリフとは兄妹のような親密な仲でした。それにも抱らずふとした遠出の時に訪れた谷間の豪邸スラッシユクロスグレンヂの長男エドガー，リントンからの求婚を受けると彼女としてはいろいろ考えた末であるにしろ，それを承諾してしまうに到っては人の思惑等も意に留めぬ自由な女性が描かれています。伝統，風習，世の道徳に縛ばられてロッチエスターのもとに止どまることの出来なかった姉シヤロットの作品の Jane Eyre　とは大分趣を異にしています。この利個主義的な考えに対して彼女を幼い時から守り育てて来た女中のネリーは，

"Iím very far from jesting, Miss Catherine." "I replied. "You love Mr. Edgar because he is handsome, and young, and cheerful and rich, and loves you. That last however, goes for nothing--You would love him without that, probably and with it, you wouldn't, unless he possessed the four former attractions."

..... "You may see some: and he won't always be handsome, and young, and may not always be rich."

"He is now, and I have only to do with the present--I wish you would speak rationally."　(Chap. IX)

「冗談どころじゃありません，お嬢さまはエドガーさんが綺麗で若くて快恬で金持であなたを愛していらっしやるという理由で愛するのだとおっしゃいますか。でも最後の条件なんて何にもなりません。そんなものがなくてもあなたはあの方を愛しますよ。又そのような愛があったとしももあの方が別に四倍もの魅力がなければ愛せないでしょう。

あの方がいつまでもきれいで若くていつも金持だというわけには参りませんのに。」

とヒースクリフのに比べれば薄っぺらなエドガーの愛情をけなし，その一時的な表面的なものにだけに心惹かれるキヤサリンを責めるのですが彼女は，

「現在そうなのですもの，現在だけでいいのよ」「もっと理性的に話してよ」とネリーにきめつけるあたり思いのままに振舞うことの出来る女性の姿が遺憾なく表わされています。

“エミリーの欲するものは自由であった。束縛からの自由であった”と姉 Charlotte は述べて居りますが

“My sister Emily loved the moors.” wrote Charlotte Brontë. “Flowers brighter than the rose bloomed in the blackest of the heath for her: out of a sullen hollow in a livid hillside her mind could make an Eden. She found in the bleak solitude many and dear delights. and not the least and best loved was --- liberty.”(2)

(「妹エミリーは荒野を愛しました。ヒースの丘の暗いがげの間に咲く花は彼女にとってはばらよりも美しく，色あせた陰気な谷間から彼女は心の中にエデンの園をつくり上げていました。荒涼とした孤独の中に，彼女は多くのいとしい喜びを見い出し，そして彼女が最も愛したものは自由でした。」とシヤーロット，ブロンテは云って居ります。何ものにも束縛されず自由に振舞うのはエミリーの憧れだったのでありましょう。彼女の求めたものは魂の自由でした。ネリーの忠告に抱束されることなく，自分の心の何処か奥深くに聞えるものに迄戸を立てて彼女は意のままに振舞ってみたかった女性の姿をかくも現わして居ります。この自由奔放な彼女の結婚生活がどのようなものでありましたでしょうか。

She seemed almost over-fond of Mr. Linton: and even to his sister she showed plenty of affection. They were both very attentive to her comfort, certainly. It was not the thorn bending to the honeysuckles, but the honeysuckles embracing the thorn. There were no mutual concessions; one stood erect, and the others yielded; (Chap. X)

(彼女はリントン氏を過ぎる程大事にしているようでした。彼の妹にさえも多くの愛情を示しました。兄妹ともキヤサリンを喜ばせる為には確に気を遣っているようでした。彼女を取り囲む吸いかづらの方に身をかがめているのはそのとげ（キヤサリン）ではなく，とげを抱きかかえるようにしているのは吸いかずらの方でした。お互が壌

(2) The Complete Poems of Emily Jane Brontë の Introduction より

歩するというのではなくて一方はシヤンとして立って居り他の方が従って居りました。)

の文に見る通りです。そして彼女のこの態度は死の直前迄続きます。

又深い念を抱いていたヒースクリフにしては前ぶれもなく関接的にきかされたキヤサリンのエドガーとの結婚の意志表示は彼には耐えられないものであり行方も知れず家出をしてしまいます。

三年の月日が経過します。漂然として帰って来たヒースクリフは立派な紳士としてキヤサリンの前に突如として姿を現す為キヤサリンを小娘のように喜ばせると同時に，エドガーの妬妖心を煽りその板ばさみに立った彼女を苦しめて遂に病気にしてしまいます。そして死の瞬間が迫って来た時の彼女の態度，言葉をさぐって見ましょう。ヒースクリフはネリーの止める言葉もきかず彼女の臨終の枕もとに立っています。

"I wish I could hold you," she continued, bitterly. "till we were both dead! I shouldn't care what you suffered. I care nothing for your sufferings. Why shouldn't you suffer? I do! will you forget me? Will you say twenty years hence, "That's the grave of Catherine Earnshaw..? ..." (Chap. XV)

(一人で死ぬのは嫌よ。あなたがどんなに苦しんでも構わないわ。二人が一緒に死ぬる迄しっかり抱き合っていたいわ。何故あなたは苦しまないのよ。私は苦しんでいるのに。あなたはぢきに私を忘れてしまうでしょう。二十年もすれば，あれはキヤサリン，アーンシヨーの墓だったと仰っしゃることでしょう。) エミリーの表わすキヤサリンは決して忍従の女性ではありません。最後迄思いのままに相手に言葉を投げつける女性であり，思うことが云えないような女性，真実の云えない人間はエミリーの軽蔑するところであります。

死の瞬間迄真実の女性。

"I shall not be at peace," .... "I'm not wishing you greater torment than I have, Heathcliff. I only wish us never to be parted:" (Chap. XV)

(私は平和な気持にはなれないわ，ヒースクリフ，私より大きな苦しみをあなたがするようにと願うのではないけれど，唯，私達離れたくないの。)

だがこれは又その自由奔放さ故に相手を悲しませる言葉でもありますが，私はこの激しいキヤサリンの言葉の中に死に直面した人の淋しさ，一人死んでゆくことの辛さが

生々しく描かれていて，多くの人の死を経験したエミリーでなければ出来ない描写であると思うのであります。

(2) 娘 *Catherine*

—やさしさ—

これに反し娘キヤサリンの如何に思いやりの深い女らしさが現わされているのかを見ることは母親と対照的で興味深いものです。この娘キヤサリンは母キヤサリンが死の床で激しい思いったけの言葉をヒースクリフに投げかけた後産んで死んでしまったその忘れ形見である赤ん坊の成長したものです。父エドガーにしてみれば愛する妻キヤサリンの面影を残すこの娘を決して嵐ケ丘には行かせないようネリーをつけて育てるのですがそれにも抱らず成長していくキヤサリンは何時か Wuthering Heights に対する強い憧れを持つようになります。父の監視の眼をのがれて吸い寄せられるように母のふる里である嵐ケ丘に行ってしまいますが，これはヒースクリフがくもが巣を張って待っように待ち構え気長に様子をうかがっていたものであります。この絶対のチャンスをヒースクリフが遁す筈はありません。あらゆる手段を用いて上手に家の中に入るように仕向けるだけでなく，自分の息子リントンに逢わせ彼女に彼を訪問させるように企みます。巧みな誘導にのせられたキヤシイは，父にもネリーにも内緒で夜毎リントンのもとに訪ねて来る頃があります。月の光を受けて雪の上を馬を走らせるキヤシイの姿はとても綺麗です。

"The moon shone bright: a sprinkling of snow covered the ground, and I reflected that she might, possibly, have taken it into her head to walk about the garden, for refreshment." (Chap. XXIV)

(月は輝いて地面を掩う雪はキラキラと輝いていました。)

だがこれを持ち受けるリントンは，ヒースクリフとエドガーの妹イザベラとの間に生れた男の子ですが大変体の弱い又弱い心を持った少年です。だがキヤシイはこの弱虫の我侭な少年をやさしくいたわり，慰さめ励してやります。時には気の向くように話してやり時には本を読んでやります。

"I've been to Wuthering Heights, Ellen, and I've never missed going a day since you fell ill except thrice before, and twice after you left your room.

...., and Linton sat in the arm-chair, and I in the little rocking chair

on the hearthstone, and we laughed and talked so merrily, and found so much to say: we ....” (Chap. XXIV)

「ネリー，私はずーと嵐ケ丘に行っていたのよ。お前が病気になって寝ていてから一晩も欠かさないでよ。リントンはね，ひじかけ椅子に座っていて，私はね，小さなロッキングチエアーで二人はとても笑ったりおしゃべりしたりしたの。おしゃべりすることも一杯あって」と彼女は後でネリーに内密で行ったことを詫び乍ら話していますが，病弱な人に対する同情に溢れた言葉です。

又この会話の中にあの有名な暑い夏の過し方についてのこよなく美しい自然描写があります。

He said the pleasantest manner of spending a July day was lying from morning till evening on a bank of heath in the middle of the moors, with the bees humming dreamily about among the bloom, and the larks singing high over head, and the blue sky and bright sun shining steadily and cloudlessly. (Chap. XXIV)

「暑い夏を過す一番よい方法は，朝から晩まで広野の真中のヒースの土手に寝そべって，蜂は花の廻りを眠たげにブンブン飛び廻り，雲雀は僕らの頭の上を高くうたい廻り，青い空には雲一つなく燦々と輝いているのを見ることだよ」とリントンは云うのよ，とキヤシイはネリーに話していますが，ヒースの丘に訪れる明るい夏の描写として有名な箇所であります。ヒースの丘に漲る生気，胸一杯に吸いこんで歩き廻り，疲れればヒースの土手に寝ころんで夏を enjoy したエミリーの姿が浮ぶようです。

自然の描写の美しさをあげれば数限りもありませんが，もう一つ光と影の交錯の美しい箇所を引用しておきたいと思います。

We deferred our excursion till the afternoon; a goldon afternoon of August: every breath from the hills so full of life, that it seemed whoever respired it, though dying, might revive. Catherine's face was just like the landscape -- shadows and sunshine flitting over it in rapid succession; but the shadows rested longer, and the sunshine more transient; and her poor little heart reproached itself for even that passing forgetfulness of its cares. (Chap. XXVII)

私共は遠出を午後迄のばしました。八月の黄金色に輝く午後でした。丘の上の総べての息吹の中には生命が溢れて居りました，ので誰でも呼吸するものは，たとえ死に

かかっている者でも生きかえるようでした。キヤサリンの顔は丁度その光影のようでした。素早く交互に交錯する光と影のようでした。だが彼女の顔には光はほんの束の間で影の方が長く止まりました。可哀そうに彼女は小さな心を痛めつつも，それでも病気のお父さんのことを思う心配を瞬間でも忘れていることに心せめられました。

生気に満ちた夏の野に対する歓び，又木陰を通る時顔にうつる木の葉のかげその光と影の交錯，細い描写であり激しいこの小説を和げるのはこの美しい自然の描写であります。

さてこの母と娘に見られる鮮やかな対照は何を意味するのでありましょうか。エミリー自身が自分の中に見出す相反する二つの性格を二人の人物の中に分けて眺めてみたのではないかと思われます。火のような情熱と雪のような冷静さ控え目。両極端の性格，エミリーも自分のことを「私は雪と火だ。」[(3)] と述べて居ります。

エミリー自体も作者の言葉として二人を比較している処がありますから引用してみたいと思います。

She was the most winning thing that ever brought sunshine into a desolate house: a real beauty in face, and yellow curling hair. Her spirit was high, though not rough, and qualified by a heart sensitive and lively to excess in its affections. That capacity for intense attachments reminded me of her mother: still she did not resemble her; for she could be soft and mild as a dove, and she had a gentle voice and pensive expression, her anger was never furious; her love never fierce: it was deep and tender.

(Chap. XVIII)

(淋しい家庭の中に光をもたらすものの中でも，こんなに可愛いい子はございますまい。アーンショー家の美しい黒い目に，リントン家の白い肌と小造りな目鼻だちと金髪の巻毛を受けついでたいへんな器量よしでございました。気が荒いと云うのではありませんが，勝気な方でことに愛情にかけては，ひときわ敏感で生き生きした心を持っておいででした。激しい愛情を秘めている点では，母親のキヤサリンを思い出させましたが母親似ではありません。鳩のようにやさしくおとなしくもなれるし，やさしい声と愁をおびた表情を持ち腹を立てても決して荒れ狂うことはなく，愛情も節度のある深くやさしいものだったからです。)

だがこの思いやり溢れるキヤシイの中にもやさしさのみでなく断固とした決断力の

(3) Margaret Lane: The Brontë Story

示されている処は我々の注意を惹く処です。姉，シヤーロットも妹のことをStronger than a man と評し，エミリー自体もその詩の中で No coward soul とうたっていますが，この強さが自分と，キヤシイの中にも現れて来た のと解釈してよいでしょう。

リントンは日々に体が弱り，元気なキヤシイに応待を続けることは耐えられなくなっているにも抱らずヒースクリフの厳令で外迄出てキヤシイの来るのを出迎えねばならぬ破目に立たされます。一方ヒースクリフの手紙によりどうしてもキヤシイを嵐ケ丘に連れて行く許可を出さねばならぬ窮地に立たされたエドガーはネリーをお伴に出してやります。が出迎えたリントンはもう立っているのがやっとのこと，自分を支え切れなくてへなへなと坐ってしまうと，

> "But my father threatened me," gasped the boy, clasping his attenuated fingers, "and I dread him.! I dare not tell!"
>
> "Oh, well!" said Catherine, with scornful compassion, keep your secret. I'm no coward--save yourself: I'm not afraid!" (Chap. XXVII)

（お父さんが恐いよ，あの人がおどかすのだもの。彼に本当のことなんか云う勇気はないよ。）

とおびえるのに，キヤサリンは，軽蔑の眼をむけて憐みつつ，（自分の秘密を人に云うものぢやないわ。私は臆病者ではないわ。自分で自分をちやんと守りなさい。私なら恐れないわ。）と厳然と云い放つあたり「男より強い」とシヤーロットの評した通りの強いしっかりした女性が描かれています。又やさしさの中に隠された強さであれば一層人々の眼を瞠らさせる処があるのを感じます。

(3) *Nelly Dean*

次に Nelly に移りましょう。さてこの物語の語り手でもある，この興味盡きぬ Nelly を如何なる女性と見るかは非常に面白いテーマでありまして，Critics の中にもネリーに就いての種々な論説が御座居ます。例えば，

John K. Mathison の *Nelly Dean and the Power of Wuthering Heights.* の論文の如く，嵐ケ丘の中に溢れる力は語り手ネリーデーンの存在に依るのであると述べる批評家もあれば

James Hafley の *The Villain in Wuthering Heights.*

としてネリーをこの小説の中では悪魔として扱っている批評家もあります。確かに Hafley の述べる如く，ネリーはキヤシイに親切に忠告すべき時に云わなかったり口出しをすべきではない時主人振って発言してキヤサリンを怒らせたり，御主人様エドガーにお知らせしなければならぬイザベラの家出を黙っていたり，意地の悪い箇所が処々に見受けられます。

又 Mathison の云う如く，キヤサリン亡きあとの失意のエドガーを励したり，少年ヒースクリフが遠出をした後も鍵をかけずに寝ずに待っていてやり，又キヤサリンが美しくなって戻って来た時は，ヒースクリフを何かと元気付けて彼女に逢わせようとしたり，確かにこの小説の力となるものでありましょう。どの人物を見ても一方だけの性格を持っていないのがこの嵐ケ丘の特長なのでありましょうが，ネリーに於いても人間の二重性を充分に認めることが出来ます。

だが私がこの人物に尽きぬ興味を覚えますのは作者がこの人物の口を通して人間の心の奥の本当の声を吐き出しているように思える処であります。これは前の研究に於いても諸々で述べた処でありますからそれをもう一度引用すると致しましても，人間の真底の言葉，又良心との闘いをネリーとキヤサリンの会話ネリーとキヤシイの会話というように解釈致しますとエミリーの意図が解けるように私は思うのであります。

"I accepted him, Nelly—" (ネリー，私は承諾したのよ。) とエドガーの求婚をしたあと，キヤサリンはネリーに打ち明ける。

"You must say why?" (まあ何故でございますか。わけを仰っしゃらなきやあ駄目ですね。)

"Well, because he is handsome, and pleasant to be with." (それはね，あの人は美男子で一緒に居ても楽しいもの。)

とキヤサリンは答えるがこのような常識的な考えに対して真向うからネリーは反対している。結婚というものがこのような浅薄な理由での男女の結合であるとすれば，エミリーは肯定出来ない，更にキヤサリンは続ける

"And he will be rich and I shall be the greatest woman of the neighborhood."

それにさ，あの人は大きな財産を受けつぐでしょう。私はこのあたりで一番金持の奥さんになりたいの。)

意気揚々と喋り立てるキヤサリンに

"Worst of all." (それが一番いけません。) ときめつけるネリーの言葉こそエミリー，ブロンテの本心である。……それなら嫁にいらっしやい，とネリーは突き離してしまう。重要なのは，現在の純愛を更により貴い純愛にまで突き上げようとするファイトのある魂の結び付きであり，つねに前向きの姿勢で突貫しようとする精神的な結合こそが愛の本質であった。(4)

と私が英文学研究第四号に於いて述べて居りますように "Here! and here. "In my soul and in my heart, I'm convinced I'm wrong." と述べるキヤサリンの心の真底の声は，ネリーの答えの形をとって彼女の隠された本心が吐露されていると思えるのであります。

又これはもう一つの別な Case でありますが，これも一度英文学研究7号の"焔の意味するもの"と題して取り上げた中に扱っているものをここに更に掲げて見たいと思います。

「年頃になった Cathy は何故か嵐ケ丘えと心惹れて自然に Peniston Crag の方えと足がむき，或る日突然しりごみするネリーを引張って無理矢理に嵐ケ丘に出かける。……リントンと秘かな文通が続いているのにそれさえネリーに見付けられて，「燃しておしまいなさい。でないとお父さまに云いつけますよ。」と命令するネリーは実に残酷で，内緒で Cathy のお伴をした責任は何処でとろうとするのであろうかと軽蔑さえ感じるのであるが，この冷い厳命をするネリーに抵抗を試みつつも，それに従うキヤシーの態度は私には二人の人間の行動とは考えられないのである。

But when I proceeded to open a place with the poker, the sacrifice was too painful to be borne. She earnestly supplicated that I would spare her one or two."

"One or two, Ellen, to keep for Linton's sake!" I unknotted the handkerchief, and commenced dropping them in from an angle, and the flame curled up the chimney.

私が火かき棒で場所をこしらえようとすると，彼女にはその犠牲が余りにも苦痛で堪えられませんでした。一つか二つは残しておいて頂戴と熱心に叫びました。

「ねえ，エレン，一つか，二つね。リントンの為にね。」私はハンカチをほどき，手紙を隅の方から中へ落し始めました。焔はめらめらと燃え上りました。」これは決して二人の人間の心ではないと考える。諦めなければならないことは自分にもよく分って

(4) 英文学研究 第四号 発表論文 "I am Heathcliff" より

はいるが諦めることは出来ない。でも勇気を出して諦めよう。でも，ほんの一部か二部かは，心の思い出としてそっと大事にしておきたい。それは誰もが持つ思いであろう。だがそれは許されることではない。勇敢にも全部を思いきらなければならない。「いいえ，いけません。全部を燃やしてしまわねば」と火にくべる，ネリーのやり方は自分と闘争して決意をする人間の心を二人の人間の姿を通して描いたものだと考えるのである。(5)

と7号で於いて述べて居ります通りここでもネリーの言葉の中にこそ人間の心の奥底の声がきこえると思うのであります。

最後にもう一ケ所人間の心の奥底の声のきこえる処としてヒースクリフとネリーの会話を引用してみたいと思います。

"Then, you are not afraid of death?" I pursued. (ぢやあなたは死が恐くはないのですがと私は続けました。)

"Afraid? No!" he cried. "I have neither a fear, nor a presentiment, nor a hope of death. (XXXIII)

(恐いって？　とんでもない。わたしは死に対して恐怖も綺惧も希望も持っちやあいないんだよ)

これはヒースクリフの死が迫った時死を直感し乍ら彼がネリーに総べてを告白する場合の会話です。

"Why, almost bright and cheerful—no, almost nothing very much excited, wild and glad!" she replied.

"Have yon heard any good news, Mr. Heathcliff? you look uncommonly animated." (XXXIII)

(まあニコニコして快活で，いえいえ，とても興奮して嬉しそうですよ。) と彼女は答えました。

(何かいい報せでもあったのですか，ヒースクリフさん。あなたは普通でなく活々していますよ。)

とネリーも驚く程で，総べてを告白してしまったヒースクリフの顔は晴々としています。これはすべてを告白し，又キヤサリンに対する愛を彼女の死後18年間も守り通しその愛を完成した歓びと解釈すれば説明出来ないこともないのでありましょうが，

(5) 英米文学研究7号"焔の意味するもの"の論文より

唯私共の心の底に何かわだかまりが残るのはこれ程の激しい憎しみに徹し，復讐を次々になし遂げたヒースクリフが，そのまま歓喜に溢れて何の不安もなく死に赴いたとしたら，それで許されるのであろうかとの限りない疑問が私共に残ります。この私共の心のわだかまりに対して救いとなって現れるのがネリーの次の言葉でありますし，これも亦ネリーの声としてではなく，ヒースクリフの心の奥底の声としてきくと面白いのであります。

"You'll be spared to repent of your many injustices, yet! I never expected that your nerves would be disordered: they are, at present, marvellously, so, however, and almost entirely through your own fault."

"You are aware, Mr. Heathcliff," I said, "that from the time you were thirteen years old, you have lived a selfish, unchristian life, and probably hardly had a Bible in your hands during all that time; how very far you have erred from its precepts, and how unfit you will be for its heaven, unless a change takes place before you die?"

"I'm rather obliged than angry, Nelly," he said. (Chap. XXXIV)

（御自分のなさったたくさんの悪業を，後悔なさいますとも！ まさかあなたの太い神経がおかしくなろうとは，わたしも思いませんでしたよ。ところが今はすっかり狂っていらっしやいますもの。それも御自分が悪いんですからね。）

（御自分でもよく御承知でいらっしやいましょう。ヒースクリフさん。十三の年から，あなたがわがまま勝手な，キリスト教徒らしくない生活を送ってこられたことはおそらくその間聖書を手にされたことはほとんど一度もございますまい。聖書の教えからあなたがどんなに遠ざかってしまわれたか。死ぬ前に悔い改めでもなさらない限り，聖書の説く天国えはとても入れてもらえないのですよ。）

（罪を認めて懺悔しなければ天国に行けませんよ。） このネリーの言葉をきいて，私共は始めて安どします。

（腹は立てないよ。ありがとうよ。） ヒースクリフの答をきいて私共も救われる気がします。

このヒースクリフの悪を悪とも思わね態度にはいろいろの解釈がなされて居ります。 A gift of God と人間を神から授ったものと考えるエミリーには人間の自然のままの姿を肯定しようという傾向があって罪の姿を認めようとしないのだろとの意見[(6)]

(6) John Herwish: Emily Brontë

を出す人もありますが，私としては，ヒースクリフにも良心は残って居りその良心の微かな声を囁く役をするのが，ネリーであると解釈すればことネリーなる存在もこの小説には実に面白い役を果し楽しめる女性像であると考えるのであります。

(4) *Zillah*

では最後に女中 Zillah に参りましょう。

Happily, an inhabitant of the kitchen made more dispatch: a lusty dame with tucked-up gown, bare arms, and fire-flushed ckeeks, rushed into the midst of us flurishing a frying pan: and used that weapon, and her tongue, to such purpose, that the storm subsided magically and she only remained, heaving like a sea after a high wind, when her master entered in the scene. (Chap. I)

「幸い台所の住民であるジラが急いでかけ上り，腕をまくり上げ，衣服をからげたこの頑丈な娘は頬は真赤にほてらし，フライパンを振りかざし乍ら混乱の最中にとびこんで来た。そしてこの武器と舌とを上手に使うと嵐は魔法のようにおさまり彼女は唯一人嵐のあとの波打際に立つかのように嵐後の高波の如く胸をはずませつつ残っていました。そこに彼女の主人が舞台に現れました。

Thrushcross 屋敷を別荘として借りたロックウッド氏が地主であるヒースクリフを嵐ケ丘に訪れた際部屋の中で犬に襲われる時の様子ですが犬の様子もこの上なくユーモラスに描かれていますが，この帚ならぬフライパンを振り廻して犬どもを追っぱらって呉れる大柄な女中も実に面白い描き方ではありませんか。 Yorkshire 地方独特な頑丈な娘がよく表現されています。

Shakespeare の *Tempest* (あらし) にも似た面白さがあります。テンペストの中の Prospero は Magic Wand を使って嵐をおこし嵐を鎮めます。

だがこの女中は料理をしかけたまま顔をほてらして飛んで来てその手にあるフライパンを振り廻して嵐を鎮めます。又プロスペロがエリエルに命令する言葉は女中ジラが犬を叱りつける言葉であります。嵐が去って舞台にはプロスペロが現れますがここでは主人公のヒースクリフがやっと地下室から上って来て姿を現します。

以上のように興味尽きぬ女性像を嵐ケ丘の中に追って参りましたが最後に Emily の好んだ詩をかかげてエミリーの描きたかったのは強い信念の溢れる女性であったこ

とを思い浮べつつ終りたいと思います。

No coward soul is mine
No trembler in the world's storm-troubled sphere
I see Heaven's glories shine
And Faith shine equal arming me from Fear
O God within my breast
Almighty ever-present Deity
Life, that in me hast rest
As I Undying Life, have power in Thee

参　考　文　献

Text: Wuthering Heights	The World's Classics
Emily Brontë	John Herwish
Emily Brontë and Freedom	C. Day Lewis
Emily Brontë and Wuthering Heights	David Cecil
Harworth Harvest	N. Brysson Morrison
Nelly Dean and the Power of Wuthering Heights	John K. Mathison
Tempest in the Soul	Melvin R. Watson
The Brontë Story	Margaret Lane
The Brontës Stories	Phillis Bentley
The Complete Poems of Emily Jane Brontë	
The Villain in Wuthering Heights	James Hafley